

血液内科病棟について

～無菌室から無菌病棟へ～

血液病科部長 衛藤 徹也
9AB病棟看護師長 深川奈穂子



はじめに

浜の町病院の血液内科病棟は70～80人の白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの血液悪性腫瘍、再生不良性貧血などの造血・免疫不全症の診療をしています。また、完全治癒をめざし、年間60例ほどの造血幹細胞移植も行っています。リンパ腫の化学療法では白血球が1,000以下、白血病では500以下、移植では0になり、感染症合併のリスクが高まります。

旧病院から無菌室を使い、このような患者さんの感染対策を行なってきましたが、当時無菌室は一般病棟の一角に作られており、白血球減少の期間中、無菌室に閉じ込められ、患者さんは非常に窮屈な思いを強いられてきました。新病院では無菌病棟となり、部屋から廊下まで無菌状態にでき、ラウンジといった寛ぎのスペースもでき、アメニティーは非常に向上しました。

今回は、新浜の町病院の無菌病棟ツアーに皆さんをご招待いたします。

無菌病棟のスペック

さて、無菌室とはいったどのようなものでしょうか？ 無菌といっても完全無菌ではありませんが、基準を満たす空気の清浄化、陽圧にすることでの一定の空気の流れ、滅菌水が主な要件です。HEPA（ヘパ）フィルター（high-efficiency particulate air filter）という高い清浄度を保つ超高性能フィルターを使って空気を清浄化します。0.3 μmの粒子に対して99.97%以上の粒子捕集率をもつフィルターです。医療以外にも高いクリー

ン度が要求されるような半導体や液晶、食品産業などにも用いられています。血液病棟では数μmから数十μmの真菌キャッチャーとして感染防御に大いに役立っています。

血液病棟は大きく3つのエリアに別れています（図1）。無菌病棟1（18床）、無菌病棟2（23床）、一般病棟（非無菌病棟）（29床）です。無菌病棟2は一般病棟の隣で、部屋は無菌仕様ですが廊下は違います。主に化学療法の患者さんが使用しており、必要に応じて売店や外出・外泊を許可しています。無菌病棟1は無菌2の奥にあり、部屋のみでなくエリア全体が無菌仕様で、主に造血幹細胞移植の患者さん用です。無菌病棟1と2の間には前室があり、入室する際にそこで手洗いや消毒を行います。衣服は特に着替えません。前室ではそれぞれの病棟への扉が同時に開かないように工夫がなされており、無菌病棟1の陽圧環境が保たれるようになっています（図2）。



図1

部屋は個室と4床部屋があります（図3）。当たり前と言えば当たり前ですが、個室にはウォ



図2 前室から無菌病棟1を望む



図3

シュレット付きのトイレがついています（旧病院では一部のみでした）。意外に思われるかもしれませんが、新病院の無菌病棟は、一見一般病棟と同じにしか見えません。

新病院、無菌病棟での治療

化学療法、造血幹細胞移植を受けるような免疫力の下がった患者さんが合併する感染症は、必ずしも外部から菌を吸い込んで起こる気道感染症ばかりではありません。なので、無菌病棟になったからといって感染症がなくなるわけではありませんが、明らかに肺炎を合併する頻度は減りました。新旧の血液病棟に入院した患者さんから検出された菌の件数を比較すると、図4のように検出数が非常に減っていることがわかりました。このように無菌病棟は治療をより安全に遂行するために大いに役立っています。

血液内科病棟細菌検出数(新旧病棟の比較)

対象期間: 旧病棟 (2013/01/01-2013/6/30)
新病棟 (2014/01/01-2014/6/30)

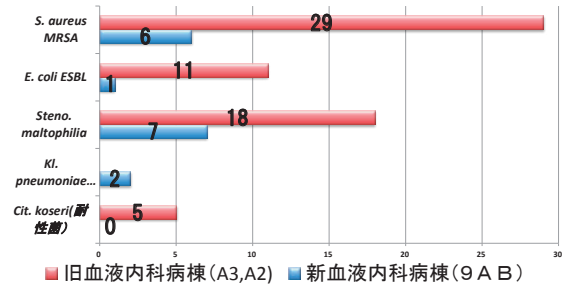


図4

新しい病院ですので、綺麗ですし、部屋自体もかつての牢獄?のような暗いイメージではなく、普通のホテルの部屋のようにです。部屋の外にも出られるということで、心理面でのストレスがとても軽減されました。ラウンジでは季節毎の催しもあり（図5）、以前の移植を受ける環境から比べると格段に快適になっています。



図5 七夕祭り

感染症は移植の成績を下げるだけではありません。人によっては、移植より前の治療で重症感染症を合併し、移植そのものを断念せざるを得ないということも起こりえます。新しく快適なこの無菌病棟で、患者さんが身体的にも精神的にも苦痛が軽減でき、多くの人が必要な治療を受けられ、そして治療成績も伸びていけるよう、大いに期待されます。